



エンジンを止めて少し待つがいなくならないので長袖を羽織って意を決して車外に飛び出す。車から数m離れるとヤツらは車に夢中で人を追って来ない。ラッキー牧場！これで安心して着替えとパッキングが出来た。



8時半に歩き始める。いきなり沢床を2~3m降りるので注意。初日はほとんど踏跡を行くだけだとナメていた新井はビールを欲張って持ってき過ぎたので早くも危ない。70Lザックが満タン。2人は40Lザックだ。しばらくは草むら歩きだ。本当にしばらく誰も通っていないようで頭近くまで草ぼうぼうで濡れた草を掻き分けながら進んで行く。最初はハッキリしていた踏跡もだんだんと不鮮明になってきた。3時間ほどで徒渉点のフタマツ沢に着くはずで、目印として樹に「二松下ル」の文字が切り付けてあるらしいが見付けられない。もう過ぎたかなあ？まだ？いや、過ぎたはず、などと言っているうちに踏跡も消え行きつ戻りつを繰り返す。蒸し蒸しと暑く汗びっしょり。途中の小沢にテン場があり、雨もパラついて来たので、これ以上降ったら最悪ここで敗退？なんてこともよぎったが13時半にやっと目印の切り付けを見つけた。



実は林中を彷徨っていると真仁田君が、「平山」という切り付けを先に見付けてその近くにこれがあった。こんなの見えねーよー！角度も方角も見えにくいしー、口々に叫ぶ。この目印から左に沢を降りるのだが、切り付けの先の方向に踏み跡がハッキリ付いているので、これを見過ごして先に行ってしまうPが多いのも納得だ。それから後々気付くのだが、コースタイムはトマが書いた「ヤマケイ入門&ガイド沢登り」を参考にしたが、やはり上級者向けの沢なのでそれなりの技術がないとコースタイム通りには行かない。具体的に八久和の場合は、ヤブこぎ、高巻き、のルートファインディング能力と泳ぎである。悪天候でしばらく人が入って居ないとはいえ、この後毎日これを思い知らされることになる。とはいえ何とか徒渉点に出た。



思ったより増水、濁りが少なくて安心した。ひざ上くらいの深さに見えたが最初の徒渉なので念のため流れと平行の3人スクラムで渡る。対岸近くに来ると腰までの強流でスクラムでないといけない危なかった。自分で撮った写真でも本に載っている写真でもそうだが、八久和川の水量、厳しさは写真ではわかりにくい。白い花崗岩の溪相は穏やかにさえ見えてしまう。実際に触れて初めてわかった。徒渉の感じと時間の遅れから今日は水線通しで行かないことにしたが対岸の踏跡もほとんど消えていてヤブコギ&悪い巻き状態で容易ではなかった。体力不足の新井は脚がツツたり、地バチに手を何カ所も刺されたり。以前、信州の民宿で地バチの佃煮を出された時、よくこんなもの食べれるなーと思ったので罰が当たったのか。おまけにバテバテなので、もうビール捨てる一、と言うと、じゃあ出して下さい背負いますから、と2人にビールを背負ってもらった始末。ホントすみません。何とかカクネ沢まで行きたかったが届かず。夕方踏み跡の赤テープを見つけた所で幕営。雨後で湿っぽかったが何とか焚火も出来た。ヤブ中で蚊はすごかった。

二日目。寝ている間に降っていた雨も止んで晴れた。樹林内を小沢を何本か渡ったりしながら1時間でカクネ沢に着く。そのまま本流に降りられないので沢を横切りもう2本先の小沢から本流に出る。



やっと本流に入渓だ！泳ぎに備えて着替え、パッキングをする。新井はサーフィン用のウェットスーツを着る。暑いかと思ったが、この後下山前までずっと着ていてちょうど良かった。雪渓近くの泳ぎではそれでも冷たかった。河原を歩き始めるとリーダーが、八久和に来て初めて楽しい、と言う。少し行くと今日歩いたと思われる足跡を発見。先述のトマのパーティのものだ。そのときは、いつどこで抜かれたんだろ、と思っていたが初日で既に抜かれていたのだ。流れ、岸の様子を見ながら徒渉、ヘツリ、泳ぎを繰り返して進んで行く。スピードに関しては大ブレーキの新井だがスクラム徒渉の時だけは頭数がいた方がいいので唯一役に立った。泳ぎに関しては得意なメンバーがいないので深く流れのある所は巻いて行った。昼頃に通った急流の中のヘツリはシビレた。余裕がなくてその写真は無いが、この写真の感じで首まで急流に浸かって、片足を動かす時に体が岩から剥がされそうになるギリギリのところがあった。真仁田君もここが一番怖かったと後で言っていた。もし流されたらどこまで行ってしまうかわからない。一度新井は膝下の流れでつまづいて転んで10メートル近く流された。また途中リーダーはデジカメを流出してしまった。



予定では平七沢までだったがやはり届かず、茶畑と大ハグラ石滝のあいだの石棚上に何とか泊まる。



夕方待望の釣りを少し出来たがチビが追っただけで釣れなかった。深すぎ、急すぎた(釣師はいくらでも言い訳は思い付く)。ちなみに翌朝40cmオーバー(太い、黒い、見た事無い体型、潜水艦という意味が分かった)を掛けるも糸切れ(朝釣っても意味無いし)。イワナ調達係失格。人間失格。で晩のおかず

は麻婆春雨に。リーダーは、普段食べたくないが山で食べるとウマイもの No. 1 と言ってくれたので良かった。ここは夜は蚊はいなかったが羽アリが大量に寄って来て料理や飲み物に入りまくリアリをたくさん食べることになってしまった。

3日目。曇り。少し水減ったか。前日はテン場の先が通過出来るか不安だったのだがこの水位なら行けた。大ハグラなどのゴルジュを巻いて行く。リーダーも3日目になって高巻のルートファインディングがだんだん冴えて来たなあ、などと思って懸垂しようとしたらATCが無い新井。おーのー！ヤブで引っ掛けて無くしたようだ。そんな事を見越していたのか予備を持って来ていたリーダーに貸してもらおう。ホントすみません。自然プールと呼ばれる淵はかなり背が立って歩け泳いだのは2メートルくらい。同じような泳ぎは何度もあった。昼頃、岩屋沢下流で源流釣り名人の大山さんに会う。かつて呂滝で潜水艦50cmを釣っている八久和の主のような人だ。小学生の孫とお父さんなのか3世代3人で来て幕営準備をしていたところらしい。釣師の定番入渓ルート为天狗角力取山から降りる登山道で来ていた。最新の天気情報や今日は少し水が多いこと、今年は上部は雪渓が多いことなど教えてくれた。とても優しい目をしていたのが印象的だった。その後、ウシ沢近くにもきれいにブルーシートの張られたテン場があったが誰もいない。皆釣りに行っているようだ。この後広河原で会ったが北関東源流会の人達7、8人のパーティだった。ウシ沢下降で来たらしい。我々がダムから入って3日目と聞くと、ウチら20年掛けて上から下まで探ったのにやっぱ沢屋さんはスゲーなあ、と。いやいや、釣りの為にこんな怖い巻やヘツリする方もすごいと思いますが、と思ったが言わなかった。この日は長い広河原の先の方の砂浜に幕営。3日目にして初めてのまともなテン場で嬉しい。



水面からは1m くらい上でちょっと心配だったが、この辺はもう水量もぐんと減ったので大丈夫だろうと。今日は少し時間があるので何としてもおかずを釣りたいところ。釣り最終日だが未だイワナを食べていない。夕方魚が浮いてきているのが何匹か見えるが先行者にやられたばかりでスレているのか普通にエサを流しても食って来ない。先ほど毛針の方が釣たと聞いたのでエサの代わりに毛針を結んで水面をチョンチョンやる。すると結構アタックしてくるが邪道なやり方なのでなかなか針掛かりしない。並のサイズの24~25cmを2匹釣るのがやっとだった。40オーバーも1匹見たが毛針は全く無視。八久和に来ればイワナ尽くし料理が出来ると思っていたが甘かった。最近カヤックでタイやサバばっか釣ってるのが悪かったか。イワナ2匹で作った3人前のチラシ寿司は甘酢ショウガ丼と言った方がいい様なものになった。何か生臭いかたまりがあったらイワナだからねー。イワナ調達係失格、人間失格。ここまでの数々の体たらくを許してもらおうべくハムやらフランスパンやら日本酒やらウイスキーやらを出して供する。そんなに（ビール以外にも余計なもの）持って来たの？そりゃザック重いわけだ。何かこのくだり、よく某大山御大や某高桑御大の文章で読んだような。2人にちょっと近づいたか？いや、益々遠ざかった。寝ている間に雨が降ったが夜明け前に止んだ。水位上昇なし。

4日目。くもり後雨。朝幕場前で2匹釣るのももちろん意味無し。出発して程なく呂滝。



写真だとただの小さな滝にしか見えないが釜は深い。潜水艦もチビも見えない。左からの巻きは楽そうに本に書いてあるが決して楽ではない。八久和通してそうだが楽な巻は一つも無い。常に緊張と体力を強いられる。9時に西俣沢出合。右が西俣。



雪溪の影響だろう。水が冷たくなってきた。9時半、中俣沢に入る。最初の滝はシャワーで越える。



この頃から雨が本降りになる。しかし雪解け水の中の泳ぎが続く。



実際水に浸かっているのは1分も無いだろうが3回続けるともう震えてヤバい。2人は頭まで痛くなって来た。この水温で泳ぎはもう無理だ。巻けるだけ巻いて行く。12m スラブ滝は左の灌木沿いをリーダーがトップで空身で登る。後続でロープを付けていてもかなり怖い。



ここを越えてしばらく行くとやはり雪渓が出て来た。



歩ける雪渓は歩き巻く所は巻いて進む。誰もGPSを持っていなくて雪渓で滝や出合が埋まっていて現在地がわからなくなってきた。時間的に今日は狐穴小屋に着くのは難しそうなので右俣出合手前のテン場適地を探すことに。地形から見てここかなあという所に笹を刈れば何とかかんとかテントが張れそうな？スペースが。決して適地ではないがここに泊まることにする。テン場から見える中俣沢。



1時間ほど登ると右俣があった。この下あたりに本来のテン場があるようだが。



連瀑帯をひたすら登って行くと草原が出て来る。

斜面でテントを張る向きも限られ脚が伸ばせなかったが、雨の中テントで寝ただけで良かった。

5日目。くもり、霧。大きな雪渓を渡ると溪相は変わる。





何と新井はこの草原がすべって登れない。後で見たら靴のフェルトが擦り減ってほとんど無かった。そういえば新品の靴のフェルトが八久和に行ったらほとんど無くなったという記録を読んだような気が。モンベルのチェーンスパイクを買って持参したが初日で片方チェーンが切れ、おまけにこの日切れていない方を無くしてしまった。家に帰ってすぐにフェルトを張り替えピンソールを買った。真仁田君は6本軽アイゼンが効いていたが、草付き、泥壁も多いのでピンソール類は必携だ。10時半、遂に狐穴小屋着。霧で視界はない。立派な小屋だ。



管理人さん以外誰もいない。この天気だ。稜線も水が豊富なので水洗トイレがあり100円で使える。ビール、ジュースも売っている。トイレ、着替え、休憩をして下山開始。何とか暗くなる前に泡滝ダムに着いてアブの歓迎を受ける。



今回の山行を振り返ると八久和は泳ぎと高巻きの技術がそのままスピードになるということ。より泳ぎが強ければそれだけ巻く箇所も減りさらに早くなる。やはり新井は体力、実力ともに足りなさ過ぎた。それを引っ張って行ってくれた2人には本当に感謝したい。

装備に関して気付いたことを少し。

スパイク類は必須。草付き、泥壁の悪い巻きが多い。装着が手間ならゴム底靴もいかもしれない。リーダーはゴム底靴でスパイクをあまり付けずに行っていた。

泳ぎのためウェットスーツ類は必須。ファイントラックだけだと寒いかも。

綺麗な白砂の堆積が多く、スパッツをしていてもどうしてもソックス内に入り歩きにくく足指も痛める。長いソックスがあるといいかも。水に入ったり出たりで普通のズボンだと水がたまってしまう。自分は途中でナイフで水抜き穴をブスブス開けた。

いつかまた近い将来、装備も技術も体力もきちんと準備した上で訪れたいと思う。